

第69回車座集会意見交換内容（環境局）

- 1 開催日時 令和6年11月10日（日） 午前11時00分から午後1時00分まで
- 2 場 所 市立高津高等学校会議室
- 3 参加者等 参加者26名、傍聴者約9名 合計35名

<開会>

司会：大変長らくお待たせいたしました。定刻となりましたので、ただいまから第69回車座集会を始めさせていただきます。

私は本日の司会を務めます環境局生活環境部減量推進課長をしております増田と申します。どうぞよろしく願いいたします。

今回は、「ポイ捨てのない、きれいなまちづくりに向けて」をテーマに、地域やボランティア団体、事業者、学生の皆様にご参加をいただき、意見交換などを行ってまいります。

初めに、行政からの出席者を紹介させていただきます。

福田紀彦川崎市長でございます。

市長：どうぞよろしく願いします。

司会：菅谷政昭環境局長でございます。

環境局長：菅谷でございます。よろしく願いいたします。

司会：それでは、福田市長からご挨拶を申し上げます。

市長、お願いいたします。

<市長挨拶>

市長：改めまして、こんにちは。今日は朝から、ごみ拾いに参加していただいて、ありがとうございます。

この車座集会はもう69回になり、様々なテーマについて取り上げてまいりましたが、今回は「ポイ捨てのない、きれいなまちづくりに向けて」ということで、私の原体験からいうと、小学校2年生のときからボーイスカウトをやっているという、その当時、ちょうど多摩川の美化活動が始まって間もなくの頃でした。最初に小学校2年生で参加したときに、僕が拾っている、子どもたちが参加している目の前で缶を捨てていかれるという光景に衝撃を受けて、こっちで拾っているそばから捨てていく大人がいて、もうびっくりしたというのを思い出します。あれから絶対ごみは捨てないということを固く心に誓って、今52歳になりました。でも、こういう経験って、させてもらってすごくよかったなと思うんですね。

おかげさまでかれこれ四十数回、多摩川美化活動は続いてきましたが、当初は粗大ごみもすさまじい数が出たんですけど、今では本当にごみを拾うと宝探し状態になって、きれいな川、河川敷を取り戻したというのは、やっぱり皆さんの意識が変わってきたということでもありますし、ごみ拾いをしてくださっている人たち、ボランティア団体がいるということで、そういう人たちのおかげで、こうやって減ってきたんだなと思います。

でも、残念ながら、今日、ごみ拾いをして、やっぱりこんなに出るんだということに、皆さん気づかれたと思います。これは絶え間ない戦いというか、努力だと思わなければならないんですけども、もっともっとみんなの意識を変えて、そして、ポイ捨てのないまちをどうやってつくっていくかということをご皆さんで今

日アイデア出しをして、そして、実践につなげていきたいなと思っております。

今日は2時間、1時までですけれども、どうぞよろしくお願いいたします。

司会：福田市長、ありがとうございます。

<参加者紹介>

司会：次に、参加者の皆様でございますが、本日は、地域やボランティア団体、事業者、学生の皆様など、26名の皆様にご参加をいただいております。お手元の座席表のとおり、AグループからEグループまでの5グループに分かれて着席をいただいております。参加者の皆様につきましては、事前に各テーブル内で自己紹介をお済ませいただいております。

<開催趣旨の説明>

司会：続きまして、本日の開催趣旨をご説明いたします。

水口生活環境部長にお願いしたいと思います。

生活環境部長：皆さん、こんにちは。環境局生活環境部の水口でございます。よろしくお願いいたします。

先ほど来ご案内しておりますが、本日のテーマは、「ポイ捨てのない、きれいなまちづくりに向けて」でございます。

川崎市では、限りなくポイ捨てのないまちづくりを目指しまして、ポイ捨てをしない人を増やすこと、そういった取組と、また、まちをきれいにする人、そういう人たちを増やす取組、この両輪の取組が非常に大切なものと考えてございます。

また、川崎市におきましては、ポイ捨て禁止条例を施行しまして、各区、毎月、啓発キャンペーンを実施したり、あるいは清掃活動を行ったりしております。また、重点区域におきましては、巡回指導なども行っているほか、日々、地域の減量指導員の方々と連携を取りながら、いろんな生活環境美化に努めているところでございます。

そういった呼びかけのほか、令和5年度には、若者の皆様と連携、参加しやすいイベントを開催しようという趣旨で、「大学対校！ごみ拾い甲子園」などを実施してまいりました。そのような形で、生活環境美化に努めるような取組を進めているところでございます。

一方で、今回参加していただいたとおり、多くの市民の方々が日頃から清掃活動などを行っていただいて、川崎市内のさまざまな場所の清掃活動に従事していただいて、ご尽力いただいております。改めまして、この場をお借りして、感謝を申し上げたいと思います。

地域の環境美化につきましては、ごみの収集体制であるとか、あるいは集積所など、様々な課題もあるかと思いますが、やはりポイ捨てというものが駅周辺であったり、川崎市の玄関口など、人が多く通るところにあるということは重要な課題と考えているところでございます。

今回の車座集会におきましては、このごみのポイ捨てに着目していただいて、日頃の活動と、本日実際に清掃活動をやっていただいて感じたことなどを踏まえて、グループワークをしていただいて、いろんなご意見をいただければと思っております。

実際にどのような課題があるのかということとを共有しながら、また、それを解決するにはどのようなアイデアがあるのか、解決に近づける方法は何かといったところを皆様からアイデアをいただきたいと考えております。

この車座集会の後には、そういったアイデアを踏まえさせていただいて、3月頃に2回目の清掃活動イベントを予定してございます。

また、来年度以降も、いただいたアイデアで実践できるものについては実践していくような取組を進めてまいりたいと考えていますので、どうぞよろしくお願いいたします。

雑駁ではございますが、趣旨の説明でございます。本日はよろしくお願いいたします。

<進め方の説明>

司会：続けて、本日の進行についてご説明いたします。

資料の1枚目、次第にありますとおり、まず、この後、会場全体で「本日の美化活動の感想と気づいた課題」について、皆様にお伺いしたいと思います。その後、各グループで「ポイ捨てのないまちに向けたアイデア」出しを行っていただきます。

それぞれの意見がまとまったところで、Aグループから順番に発表していただきまして、会場全体でさらにいいものとなるよう、意見を出し合って内容を深めていくといった流れになっていますので、よろしくお願いいたします。

それでは、ここからの進行につきましては、福田市長にお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

<意見交換 発表「本日の美化活動の感想と気づいた課題」>

市長：では、よろしくお願いいたします。

これから15分は、「本日の美化活動の感想と気づいた課題」、これについて各グループの代表者様からご発表いただきたいと思います。15分間ですので、1グループ約3分ということで始めていききたいと思います。

それでは、Aグループから順番でよろしいでしょうか。越水さんからいいですか。

越水さん：お疲れさまでございます。Aグループのリーダーを務めさせていただいております越水と申します。よろしくお願いいたします。

キラッとおそーじ同盟という活動を去年の10月から始めておりまして、その前は、10年ほどグリーンバード溝の口チームで、同じようなお掃除活動をやってきております。

今日、僕らAグループは、幸いにも僕がよくやっている溝の口駅の南口というエリアなんですけど、大体西口とか北口というエリアは結構飲み屋さんが多くて、さっき福田市長も言われていましたけど、昔とはやっぱり環境も変わってきていて、今、居酒屋の方とか、商店街の方がすごく掃除をしてくれる環境があつて。西口商店街に行かれた方はいますか、今日。西口商店街の辺りははないかな。

南武線の通りの辺りは、あそこは昔、めちゃくちゃ汚かったですよ。でも、多分今日、掃除をしてもらって分かったと思うんですけど、めちゃくちゃきれいなんです。たばこの吸い殻もかなり減っています。10年前にやったとき、本当に空き缶、ペットボトル、たばこの吸い殻がすごく落ちていて、僕は溝の口出身なんですけど、小学校の頃は、あそこは危ないから通っちゃ駄目というエリアだったんですね。呑兵衛さんに、このやろうと言われるし、おじさんたちに、このガキと言われるし、そういうエリアなんですけど、今は、本当に通りやすいエリアになっています。

今日やってみて、もうずっと長い間やっている中で、どんどんごみが減っています、正直。皆さんが、こういうごみの環境に触れることが多いのかなというところと、こういった社会貢献活動に参加してくれる方が増えていると思いますし、あと、SDGsとって世界的な目標ができていながらもあるんですけど、非常にごみが減ってきているなという印象があります。

それと、今日、こういう機会をいただいてすごくうれしいなと思ったのは、最初に趣旨説明で楽しくコミュニケーションを取りましょうという話があつたんですけど、やはりこういった美化活動って、今、

何人かに聞いて、1人でやられる方もいらっしゃるんですけど、1人ってなかなか続かないんですよね。僕も月に1回、第1日曜日をメインでやっているんですけど、初めての方と、慣れている方がいて、みんながミックスして、コミュニケーションを取ることで、こういう活動が長く続けられるなと思っているので、今日こうやってお会いさせていただいた方々も、またぜひ次回も一緒にやりたいなと思います。

ごみがいっぱいあるところを見つけるのは、もう大変になってきています。ここにごみがあるから行ってみようと思って、ないときは、子どもたちはすごく落ち込むんですよ。宝物がないので。なので、やっぱり日々の生活の中で、ごみがいっぱいあるところにぜひ行きたいなと思っているし、今日もすごく笑顔があふれる会だったなと思っていて、それに関しては、もう皆さんが楽しんでやってくれる、この波を、今参加していない方にも広げていきたいなというのが僕のイメージの中にあるので、ぜひ今日は楽しかったよとか、次に行くときに、お友達も含めて一緒に行ってみようよというような形ができるといいなと思っております。僕の感想は以上になります。

市長：ありがとうございます。本当に楽しかったですよね。ありがとうございます。

それでは、Bグループ、今井さん、お願いします。

今井（雄）さん：Bグループの今井雄也でございます。一般社団法人サステナブルマップの代表をしております。

我々の活動は、今、麻生区を起点にしているんですが、地域の子どもたちとまちの推し活をしようぜという活動をしております。なので、地域資産と、それをどういうふうに結びつけるのか。今、SDGsのお話も越水さんからありましたけれども、ゴールと結びつけると、どんなものができるのかということをするのと一緒に、子どもたちがやりたいことを全部実現するというアクションを起こしております。

それは、失敗することも含めて見せているような活動をさせていただいて、大きな成果の1つとして、もともと私の娘、そこに座っているんですけども、学校給食のストローをなくしてみたいという、その一言から始まりまして、最終的には一般社団法人までさせていただきました。昨年度から全部ストローレスパックに移行という、家庭で話していた小さな話が社会を変えることもあるんだよということ、今参加してくれているメンバーにも話をしております。

今日は、ごみ拾い、クリーンアップ活動に参加させていただいて、我々は麻生区に住んでいるんですが、実はごみはほとんどないんです。多分、今日拾った量の5分の1ぐらいしか取れないんですね。それはよしあしの話ではないんですけども、今日、麻生区から参加していた子どもたちに言っていたのは、僕らが麻生区で見たことがないごみが拾えるはずだと。その意図とかストーリーというのを考えてみようねというので、参加メンバーにも話をさせていただきました。

なので、まさか大きい座椅子とか、僕は拾わなかったんですけど、消火器ですとか、あとは、よもや持っていく人の気持ちを考えていない鉄アレイですとか、なぜそこにいるのを考えられるのが拾う側のことだと思うので、じゃあ、どうやって捨てているんだろうというのがすごく気になりました。

商店街の、先ほど越水さんもおっしゃっていたんですけど、本当に居酒屋さんの通りは何もごみがなくて、これはやらせじゃないと言いながら歩いていたぐらい、本当にきれいな場所でした。そうじゃないところ、人目にちょっとつかないところになった瞬間に、ごみがこうやって集まっているというのを課題解決の方法として、どんなものができるかなというのが、今日お話できればなと思っております。ありがとうございます。

市長：ありがとうございます。

それでは、Cグループ、西さんお願いします。

西さん：西と申します。川崎市立井田病院というところでドクターをしながら、一般社団法人プラスケアというのを立ち上げて、暮らしの保健室という、まちの中の医療者と市民の方々が気軽につながる場所みたいなものをつくって運営しております。

美化活動の話というのは、僕が何でこんな活動をしているのかということから話をしていくと、今、孤立、孤独という問題が世の中にはあって、その孤立、孤独というのがあると、寿命が縮むという研究結果が出ていて、なので、僕ら医療者というの、その孤立、孤独という問題というのを1つの社会課題として何とかしていかなくてはいけない。

その中で、こういうごみ拾いの活動は、今日皆様に参加していただいて、本当に1人で黙々とごみを拾うんじゃないで、自分の拾ったごみを誰かの袋に入れて、これをお願いしますというふうにやったり、そういうところで小さい交流が生まれたりだとか、本当に子どもとかが頑張っているのを見て、落ちているよ、拾ってごらんとか、その人の名前をすごく覚えているわけじゃないかもしれないけれども、そうやって、自分がここに存在するんだということをちゃんと感じられるという、こういう活動がまちの中にたくさんあるということが、まちの中の孤立、孤独というのを1つ解決していく手段になるんじゃないかなと思って、今回も参加させてもらってよかったなと思います。

僕は、ふだんは中原区に住んでいて、活動場所が中原区なので、グリーンバード武蔵小杉チームとかもよく参加しているんですけども、武蔵小杉のほうが結構ごみが多いなという感じがあって、溝の口は本当にきれいだなというふうに、今回感じました。中原区、武蔵小杉は結構ほかの、横浜側から来る人とか、東京側から来る人とか、そういうところの交差点になっている部分もあるので、そういった方々とかが武蔵小杉とかでごみを落としていたりする部分もあったりするのかなと思ったり。それから、川崎というまちがごみを落としてはいけないまちなんだみたいな感じのところという、そういう文化みたいなのを皆さんでつくっていただければなと感じました。

以上です。ありがとうございました。

市長：ありがとうございました。

Dグループ、田中さん、お願いします。

田中さん：皆さん、改めてこんにちは。高津高校3年に在学していて、今は引退してしまったんですけど、生徒会で高津クリーンプロジェクトという清掃チームを運営していて、今は若者団体カワリープアクトという高校生主体の若者団体を立ち上げ、そちらのほうで清掃活動をしております。

このグループは全員一緒に清掃活動をしていたメンバーだったんですけど、やっぱりまず、地域の交流ができた、楽しかった。この清掃活動をやって楽しかったというところなんですけど、清掃活動は、やりながらコミュニケーションが取れるという意味で、人とつながる場だと僕は思っています。先ほど西先生もおっしゃっていたような、そういうコミュニケーションが生まれることで、人との関わりが持てるというのは、それは生きる意味にもなると思いますし、何かといいことにつながるなと感じました。

その中で課題というところでは、皆さん、線路沿いを通られた方も多いと思うんですけど、線路の中に傘だったり、奥に、悪いことですけども、恐らく柵の上から投げ入れた空き缶だったりペットボトルだったりすごく落ちてはいるんですね。

僕もふだんから高津高校周辺のこの線路沿いを清掃していますが、本当にそれが、手が届かないし、やるせないというか、何でこのごみは取れないんだよ、こんなに汚いのにと、景観を悪化させるじ

ゃないかと思うんですけど、JRさんとも協力しないといけないしというところで、難しいなとも感じながらなんですけど、今後のきれいなまちをつくるという意味では大切なところになってくるんじゃないかと思った今日1日の感想でした。

市長：ありがとうございました。

最後、Eグループですね。今井さん、お願いします。

今井（結）さん：しゃべった中では一番若いんじゃないかなと思っています。中学校3年生の今井結菜といいます。

先ほど父がお話ししたとおり、父と一緒にかわさきSDGs推進隊という活動をしています。ごみ拾いの活動は、ごみを拾うことはもちろん目的だと思うんですけど、子どもがごみをたくさん拾って、それに感化された大人たちが拾うという光景を見て、改めて子どもだからできないことは本当になくて、子どもだからできることもあるし、大人だからできることもあるんだよということを改めて実感しました。

今日は、そういった面でも私自身が考え方を改めさせられた日でもありましたし、何より交流できたのがすごく楽しかったです。ありがとうございます。

市長：ありがとうございました。

それぞれ感想と課題を言っていたいて、時間もぴったりでございます。ありがとうございます。

さっき西さんが言っていましたけど、あれは最初にアナウンスがあったんですね。ビニール袋は自分で拾ったら、ほかの人のところにと。すごく大事ですね。僕は、自分で自分の袋に入れていました。黙々とやっちゃって、でも、そうすればよかったと今思いました。ちょっとした工夫はすごく大事ですね。楽しくなるという感じがしました。ありがとうございます。

<ワークショップ「ポイ捨てのないまちに向けたアイデア」>

市長：それでは、次のステップに移ります。ワークショップをさせていただきますが、グループごとに、「ポイ捨てのないまちに向けたアイデア」出しをしていただきたいということで、時間は11時45分までです。この間に、皆さんアイデアを出し合っていたいて、後ほどそれをまた発表していただく形にしますので、それでは、作業に入っていただければと思います。よろしくをお願いします。

<各グループの案を発表>

市長：それでは、よろしいでしょうか。順番にやりたいと思いますので、お願いいたします。

それでは、20分間の発表なので、大体各グループ4分ぐらいの目安でお願いしたいと思います。

それでは、Aグループからよろしくをお願いします。

園田さん：はい。お願いします。高津高校に在学していて、今高校3年生です。

まず、本日の美化活動と感想ですが、出た意見として多かったのが、人と関わったことが楽しかったという意見が多く出ていて、子どもとコミュニケーションを取れたり、大人と子どもと一緒にごみ拾いができたりしたという点で、たくさん意見が挙がりました。

溝の口周辺でごみ拾いをして気づいたこととして、たばこや空き缶が多かったというのと、ごみが捨ててあるところにごみが集まるというように、ごみのある場所はすごくごみが多かったり、ごみのない場所は、ごみがなかったりという光景が見られました。

そして、「ポイ捨てのない、きれいなまちに向けたアイデア」は、たくさん出ているんですけど、その中で、ごみ貯金箱だったり、自動販売機の形式みたいに、捨てたものが道に出てくるみたいな、そういう感じにするとか、捨てている人の動画を撮って、スクリーンとかに大きく映し出して、それで恥ずかしいと思ったりして、ごみを捨てる人を減らすとか、あと、昔あったらしいんですけど、空き瓶を持っていったらお金がもらえるみたいな、そういうので、ごみを持っていったら、お店で使えるポイント券だとか、お金がもらえたりするような工夫をすれば、子どもがごみを持っていったりできるなと思いました。

全てをまとめて実践できそうなアイデアとして、みんなが入れたいくなるようなごみ箱を設置したいと思います。入れたいくなるようなごみ箱というのは、例えば、バスケットゴールみたいにして、みんながシュートして入れる感じにしたら、若者とかバスケットが好きな人は入れるのを楽しんだり、ごみ貯金箱みたいな感じにすれば、ごみを入れただけでお金がもらえるので、子どもだとかはすごく喜んだり、動物が口を開けているごみ箱だったら、子どもも大人もかわいいと思えたり、あと、写真を撮って、そういうので映えとかが狙えるかなと思いました。

ごみ箱を入れるときに楽しく入れられるとか、大きなものにすればするほど目について、ごみが減るんじゃないかなとかといったことをAグループでは考えました。

以上です。ありがとうございます。

市長：ありがとうございます。

越水さん：すごくいいよ。

市長：すごくいいというやじがAグループから出てくるという。応援やじがすごい。Aグループ。

越水さん：自画自賛。

市長：では、Bグループ、お願いします。

牧野さん：Bグループの発表を始めていきたいと思います。

僕は、グリーンバード専修大学という団体で、ふだんは多摩区の登戸地域周辺でごみ拾いをしている団体に所属しています。

今回、午前中にやったごみ拾い、美化活動を通しての感想として出てきたのが、そもそもごみが多いよねというのは皆さんの意見で出てきて、その中で気づいた課題としては、地域ぐるみでごみを捨てるという行為をどうやって止めていくかみたいなのが結構主題として出てきました。最近だと、ごみを捨てる子どもがいたとしても、叱る大人がいないよねという問題だったり、加えて、最近、まちにごみ箱が減ってきていると思うんですけど、その影響もあって、ポイ捨てが進んでいるんじゃないかという問題、そして、罰則というのが明確化されていないというか、あるのは知っているけれども、具体的にどれくらいの罰則があるのかという、捨てたら、どのくらいの罰則があるのか分からないから捨ててしまうんじゃないかという問題というのが、美化活動を通じた課題として、Bチームから出てきました。

その課題が明確化された後で、じゃあ、そこに対してどういうアイデアを、どういう施策をしていけば、この問題というのが減ってなくなっていくのかというのを出していったところ、何点か出てきました。まずは、子どもに対するポイ捨てをしないという教育。これは何かというと、僕も以前、地域の児童館のほうに活動として行ったことがあるんですけど、その際に、子どもたちが問題として挙げていた

のが、どこにごみを捨てていいのか、駄目なのかという、その境目が分かっていないと。近くに小川があるんですけど、そこにごみをポイ捨てる子どもがいるという話を聞いたんですよ。

じゃあ、そういう子どもがいますといったときに、その反対のお子さんもいらっしゃるって、グリーンバード新百合ヶ丘にずっと参加されているお子さんで、そのお子さんは、ふだんから学校帰りにビニール袋を持って、ごみを取って入れているらしいんですよ。お母さんに、これだけごみを取ったよと報告してくれる。それだけ大きな違いがある。

ということは、将来的にこの問題、ごみを捨てる、ポイ捨てるという問題を生んでいるのは、子ども時代の教育が鍵になっているんじゃないかという点が挙がりました。あとは、どこの地域に、どのぐらいごみがあるのかという、言わばヒートマップみたいな、そういうのをつくるというのではないかというアイデアが出ました。

それをまとめて、実践できそうなアイデアとしては、先ほどの教育という観点から、体験から経験をどうつなげていくかという部分でアイデアが出まして、体験というのは一時的なものと定義されているというか、考えると思いますけど、こういうごみ拾いをする体験だけど、それが継続的に続いていくかという、続いていけない人が多いと思うんですが、そこを体験から長期的な経験にどう結びつけていくかというところで、最初は子ども時代から、例えば寺子屋とかで体験をさせていく。そこからポイ捨てでアート作品を作るなど、もともと価値がないというか、捨てられたものを使って、価値のあるものにしていくと。アップサイクル的な考え方を通して、経験につなげていくという、この体験から経験のフェーズを通して、平気でごみを捨てる大人をつくっていかない。子どもたちのための教育が大切なのではないかというアイデアがBチームでは出ました。

以上です。

市長：ありがとうございました。

すばらしいですね。学校帰りにごみ袋を持って帰ってくるってすごいですね。

瀬川さん：Cグループの発表を始めさせていただきます。

私は、専修大学の2年生で、S I Vというボランティア団体で、登戸とか向ヶ丘遊園から大学までの道のりを朝清掃といった形で、月に2回ぐらいのペースでさせていただいております。

アイデアがたくさん出た中で、厳選して、これはいいねとか、実践できそうだねというアイデアが大きく分けて3つあって、まず、AグループとBグループと結構似たアイデアだなと思ったんですけど、まちの中にごみ箱を増やして、それを市民が管理する、(ごみ箱を)置くのにはコストの問題とか、多分僕なんかには考えられないような難しい問題というのがたくさんあると思うんですけど、それを市民が管理すればいい。(市民が管理)できれば、そういった問題は少なくとも減らせるんじゃないのかというので、捨てたい場所にごみ箱があれば、それが 受皿になって、ポイ捨てるはなくなるはずという考えから、こういったアイデアが生まれました。

ごみ箱に捨てたくなるようなアートを取り入れるというので、1つ実例として、渋谷かどこかで、たばこを吸ったごみを投票できるような形、A、Bみたいに投票を入れて、それを可視化できると、Aにいっぱいあるとか、Bに投票は少ないなみたいな、そういうのが見えたりとかして、捨てたくなるような投票、この投票をしてみたいなというのが1つのアートになるんじゃないかと思います。

また、逆に、捨てたくないアート作品というので、これは例えば地面とかに、これも1個実例があって、自転車の放棄とかに、地面に子どもが描いた絵があると、そこには自転車を置かないようになるという事例があって、それをじゃあ、ごみにも生かせるんじゃないのかということで、捨てづらいうようなアート作品、子どもが描いた絵がある場所はやっぱり捨てたくないなというのは、文字よりもデザイン、

ぱっと見て分かるようなもののほうがいいんじゃないのかというのがあって、どちらも実例があるもの、それに効果があって、いいデータというのがあるものなので、川崎でも実践できるんじゃないと思って、そういった話をCグループでしました。以上です。

市長：ありがとうございました。

勝山さん：Dグループです。私は一般社団法人プラスケアの勝山と申します。日頃、暮らしの保健室という、医療者と気軽におしゃべりができる場所の運営に携わっております。

Dグループは、ごみ、ポイ捨てを減らすためのアイデアは3つ思い浮かびました。

ごみを捨てると駄目だよというのももちろん大事ではある。罰則というのも大事なんですけれども、どちらかというと、ごみを捨てるのと快感に変わるではないですけど、ドーパミンがドバドバ出るみたいな、そういったことができるといいのかなというところで、まず1つ目が、ごみ拾い街コンです。グループで話し合っていて、好きな人にごみ拾いに行かないと言われてたら、断ると、自分が社会貢献性がない人だと思われちゃうとか、好きな人に誘われたら、デート感覚で行っちゃうかなみたいなところもあるので、ちょっと恋愛と絡めるというところですね。やっぱりごみを捨てる人と付き合いたくない、ごみをポイ捨てする人と付き合いたくないよねみたいな話もあったので、ごみ拾い街コンはドーパミンがドバドバ出るんじゃないかなというところがまず1つ。

2つ目が、先ほど投票というのが出ていたんですけれども、同じような形で、ごみを特定の場所に捨てる、A、Bとか、男女の友情は成立するか、しないかみたいな、する、しないみたいな感じで投票ができたとか、または、僕は結構ゲームが大好きなんです。ゲームをすると、やっぱりドーパミンがドバドバ出てくるというところで、ごみを捨てるところに、敵キャラ、何でもいいんですよ。ポケモンだったら、ミュウツーとかでもいいし、ドラクエでも何でもいいんですけれども、ボスキャラの体力ゲージが書いてあって、捨てるとどんどん体力が減っていくみたいな、そういったごみ箱を作るというのかなというところ1つ。

3つ目が、今回のイベントもそうなんですけれども、ごみ拾いイベントを増やす。やっぱりごみ拾いイベントに参加した方というのは、取りあえずポイ捨てをやめようという方が多いので、こういったごみ拾いイベントを増やすと、ポイ捨てをする人が少なくなるのかなと。多分ごみ拾い街コンに出た人は、ごみのポイ捨てをしなくなるなと思うので、快感に変わるようなものができるといいのかなと思いました。以上です。

市長：ありがとうございました。

光廣さん：Eグループの光廣です。ふだんは、先ほどのBチームの牧野と一緒に、グリーンバードの活動をしています。同じサークルです。今日はよろしくお願ひします。

僕たちの感想と気づいた課題は、本当にいろんなところにごみがあるよねというのがまずあって、特にたばこのポイ捨てが多かったの、たばこのポイ捨てをなくそうというふうに、僕たちは方向性として考えていました。

何でたばこのポイ捨ては起きるんだろうと話したときに、2つあるかなと思って、1つは、そもそも捨てる場所がないというのがあって、2つ目が、ポイ捨てをすると、こうなっちゃうよみたいな認知が不足している、この2点かなと思っています。

解決策の方向性としては、いろいろあるんですけど、捨てる場所がないことに関しては、捨てる場所を増やそうというので、皆さんからも意見がありましたが、ごみ箱を増やそう、そしてごみ箱をもっと

かわいくとか、もっと捨てたいと思えるようなデザインにしようというのがありました。どうしてもたばこのポイ捨ては、灰皿は、銀色の縦長で、あそこはもう絶対たばこを捨てる場所だよとか、まちの景観からしても、もうあそこはたばこの場所だという、ちょっとマイナスなところがあるんですけど、むしろたばこのごみ箱をもっとかわいくするとか、場のつくり方を僕たちはもうちょっと考えたほうがいいんじゃないかなと考えました。

いろいろ意見はあったんですけど、個別のところ、側溝にごみ、たばこのポイ捨てがあるということに関しては、例えば、側溝に、海とつながっていますみたいな、直接言葉にして、罪悪感を抱かせようみたいなアイデアとか、あとは、認知不足に関しては、小学校でも、ふだん吸っている人でもいいんですけど、T i k T o kだったりとか、実際にワークショップをしたりして、こういうことが実はあるんですよみたいな認知を増やそうというふうになりました。

じゃあ、実際にたばこのごみ箱をつくる時のデメリットは何だろうと考えて、今までたばこのごみ箱は、通行の妨げになったりとか、副流煙につながるよねということで、どんどんなくなっていったと思うんですけど、それを解決するために、今後どうすればいいのかというのをこれから話していく予定です。長くなりました。ありがとうございます。失礼します。

市長：ありがとうございます。

全ての発表をいただいて、とてもうれしいというか、面白いアイデアが出てきて、デザイン的なもので解決しようというお話もありましたし、感覚的なものですね。少し街コンみたいな話も出てきましたけれども、人とどうやってつながるかということで、楽しさを出して、巻き込み方とか、そういう意見もありました。

実は僕も、藤迫さんがさっき言っていて、そうなんだよなと思ったんですけど、ごみが落ちている、ごみを拾いたい、でも、出かける途中、拾ったごみはどうする？と思うから、うっと思いつながら拾えないという、結構それはありますよね。

まちの中からごみ箱がなくなったというのは、サリンのテロ事件のときから一気にまちや駅からごみ箱が消え、最近では、コロナで衛生上非常に問題があるということで、さらに消えというように、まちの中から本当にごみ箱がなくなったと思うんです。

その流れと同様に、ごみは自分で持ち帰るものということになって、そういう論理できたんだけど、果たしてそうなのかということについては、何となく皆さんの話を聞いていて、美化とは関係のない話でごみ箱が減り、そして、今もそれが続いている。ただ、ごみ箱があると、誰が管理するの、どうやって、誰がその負担をするのという問題も出てきますよね。

それについて、Cグループでも議論があったと思うんですけど、どんな議論がありましたか。ごみ箱の管理をするというふうなことについて、何か言っていないでしたっけ、西さんのところは言っていなかった？ちょっとどういう議論をしていたのか、少しお話しいただいてもいいですか。

本江さん：最初のですかね。まちの中にごみ箱を増やして、それを市民が管理して、その片づけた人に何かしらのメリットがあるようになれば、進んで、じゃあ、私たち、この団体がやるよとか、例えば小学生とか、子どもとか、僕たちはごみを回収しましたというふうになるかなという話が出ましたよね。

市長：なるほど。ありがとうございます。

基本的に今までの川崎市の方針って、ごみ箱を増やさないというか、撤去する方向でいたんですよ。局長、そうですね。どういう議論でそうなっていったのかをちょっと説明してもらえますかね。ぶっちゃけたほうがいいのかと思います。

環境局長：まず、ごみ箱が置いてありますと、ごみのごみを呼ぶというところが1つあったということですね。自動販売機の隣によく、飲んだ後に入れられるところがあるじゃないですか。あそこにも意外とほかのごみが入っていて、皆さんみたいに、しっかりした人たちじゃない方も残念ながらいて、そこがやはり迷惑行為につながってきて、逆に汚くなっていったというのが現実でございます。

あとは、先ほど言った防犯上の関係もあって、過去には設置していたんですけど、撤去せざるを得ない状況になっていったのが現状でございます。

市長：ありがとうございます。

実際、コンビニのごみ箱とか、あるいはこの前びっくりしたのが、スーパーに僕が行ったら、ここにはオムツなど家庭のごみは捨てないでくださいという貼り紙が貼ってあって、ここまでオムツを持ってくるといふことにびっくりしたんだけど、実際にごみ箱があると、そういう方もいらっしゃる。だから荒れるというのは、局長が言われている話もそれは一面あると思うんですね。

だから、実際はどうやってコントロールしていくのかと。ごみ箱のコントロールは結構難しい課題だと思うんですね。

何かアイデアがある方はいらっしゃいますか。

今発表の中でも、捨てるところがちゃんとあればいいんだという意見は結構ありましたよね。だけど、その問題は解決できるでしょうか。何かご意見がある方はいらっしゃいますか。

今井さん、お願いします。

今井（雄）さん：ごみの大小にもよるとは思うんですけど、今日、僕は本当に衝撃だったのが、椅子が捨てられているというところで、あれって要は廃棄料を払うことになるじゃないですか。

都内だと、場所にもよるんでしょうけれども、自分たちで持ち込むことでお金を払って行ける場所があると思うんですね、処理をするのにタイムラグがあるから捨てちゃうという人たちを予防する意味では、例えばヨネッティーさんとか、ごみ処理センターでの受取りなんかができるようになると、そういう問題は少し減るのかなというのは今ちょっと聞いていて思いました。以上です。

市長：そうですね。川崎市が去年から始めている取組で、ジモティと連携して、宮前区の水沢にある店舗に、今までだったら粗大ごみで出していたものを持ち込んでいただくと、捨てなくて済むということで、またその捨てられそうになった家具や椅子だとかが、地元で引き取ってもらえるという、そういういい循環も始めました。確かに大きいものは、そういうもので解決するかもしれませんね。

どうぞ。西さん、お願いします。

西さん：例えばコンビニのごみ箱とか、公園のごみ箱とかというのは、こういう言い方はあれかもしれないけど、結構ぞんざいに扱っていいものみたいな、さっきごみのごみを呼ぶとおっしゃっていたんだけど、やっぱりそこが汚くなっていると、さらに汚くしても別に大丈夫だ、もともと汚いんだからみたいな感じになるような気がして。だから、さっきうちのチームで出たみたいに、ごみ箱自体がアート作品になっているとか、ごみを入れていくと、それがより楽しくなっていくとか、そういうものだったり、市民が管理していますと、例えばそこに何とか小学校、何とか君が管理していますよとかになったら、そこはちょっと汚くしがたいじゃないですか。

そういうふうな感じのことを、しかも、実証実験として、これを永久的に置くんじゃなくて、例えば1年間とか、2年間とか置いてみて、本当に同じような問題が起きないかどうかみたいな感じで。全国

からアーティストを集めて、さっきアイデアが出たみたいな、動物の口が開くみたいなものをつくるアーティストもいるかもしれないし、もっと、アイデアがあるかもしれない。

川崎市が全国からアーティストを集めて、こんなごみ箱を作るみたいなことをやりましたというのが、1つのニュースになったり、永久的に置くというのだといろいろ大変かもしれないけど、それを2年間、3年間とか時間を決めて、しかもさっき言ったみたいに市民の人たちが管理するみたいなことまで全部うまくいくかどうかというのは、これは実証実験なんですというふうにするんだっただけならできるんじゃないかなとちょっと思いました。

市長：ありがとうございます。僕もそういうのはやってみたいなと思いますよね。果たして本当に無理なんだろうかと。だから、今、行動変容を促すようなデザインだとか手法とかを実証実験で試してみる価値はあるんじゃないかなと思いますよね。単純に駄目と言い切って、でも、このごみどうするのという問題解決から、ソリューションがないというのだとなかなか難しいから、そういうのはあっていいかなと思いますね。

これに関して何かご意見がある方はいらっしゃいますか。

はい、どうぞお願いします。

田中さん：自分も今実証実験みたいところでちょっと思っていたのが、こういう、何だろう、場所や管理という問題のときに、その地域に落とし込むことが重要だなと思っていて、例えば、生徒会だったり学校ごとだったり、あとは地域の自治体の町内会だったり、自分たちがやっている若者団体だったりというところで、何か実証実験のベースとして管理してくれる方をまず募集してみて、そこに例えばうちとかが入っていけば、それこそその管理を取りあえず1年間とか毎週の単位でごみの管理まで、ごみの場所に関しては清掃局さんと協力して、ここにごみを集めておいてくださいという話にすれば、何かできないこともないのかなと思っていて。

市長：なるほどね。

田中さん：そう、やりたいという人はいると思うんです。自分はどっちかというのと、それでまちがきれいになるんだっただけなら、うちの団体と一緒に活動という意味でやらせてもらいたいと思っちゃいますし、そういう思いを持った人は絶対地域にいると思うので、もっと何か募集的なところで、ボランティアに近いですけど、そういう活動にしてみたほうが実現性は高いんじゃないかなと思いました。

市長：なるほど。ありがとうございます。

実は私たちの廃棄物行政は、地域の自治会、町内会にもものすごく依存しているというのがあって、この方たちの負担をさらに増やすということはあり得ないと僕は思っているんですね。だけど、今、田中さんにおっしゃっていただいたように、やりたいという人たち、自分たちでできると手を挙げてくれる人たちがいれば、その方たちの力を借りない手はないなと。そしてやって気持ちよくなるというか、今日も私たちみんなそうだと思うんですけど、ごみ拾いは、やっぱり自分の気持ちがきれいになったというか、まちもきれいになったし心もきれいになったような気がしますよね。そういう何かうまい循環をつくれればいいなと思いますね。

越水さん、いろんな活動をやっている人を巻き込んでいくのがすごくうまいと思うんですけど、この点に関してどうですか。

越水さん：ありがとうございます。僕は実際の自分の事業としては、デザインの仕事と不動産の仕事をやっているのですが、今、田中さんが言ったみたいに、本当に例えばオーナーさん、大家さんレベルでも、うちの共用のごみ捨て場所を使っているよという人はいると思っていますよ。

僕自身、本当にまさに水沢の清掃局の持込みとかじゃないですけど、結構粗大ごみとかを清掃局に持ち込むことがあるんですよ。それは何でかという、粗大ごみが、多分月に2回ぐらいしか来ないじゃないですか。それを置いておくこと自体がもう美的に嫌なんです。なので、持ち込んだりとかするんですけど、それで結局、今言われた意見みたいに、多分もう結論で言うと、行政さんをお願いしますじゃなくて、完全に民間だったり巻き込みだったりのところでこういうものを解決していかないと、ごみは減らないなと思っていて、どんなに、多分100年ごみ拾いを続けていてもごみは絶対あるんですよ。

ある場所は大体分かっていて、風が止まる場所、壁があって、例えば建築現場の空き地の中の壁があるところは大体あるんですけど、そういうのは逆に建築会社さんにお任せするとか、そういう民間の力がどんどんごみ拾いに入ってこないかと思う。だからキラッとおそーじ同盟は、グリーンバードというところからなぜこっちに変えたかという、今まではナショナルネームの企業さんと共にやっていた団体から、地元のスポンサーを得て、その人たちと共にやっているんですけど、さっきもあつた拾ったごみはどうするんですかという話なんですけど、各企業とコラボするときは各企業が捨ててくれるんですよ。その関係をずっとつくっていけば民間でできるし、それをずっと清掃局に任せているとなかなかできないところなんですけど、そういう民間の力が必要なのかなというところと、やっぱり今ここにいらっしゃる皆さんは、多分ごみ拾いにかなりアンテナが高い方が来ていますけど、まだまだアンテナが低い人はめちゃくちゃいるので、その人たちをも変えるとなると、もう本当に民間の力が必要だなというのは、僕がずっと活動している中で感じていますね。

市長：すごくいい取組ですよ。

越水さん：ありがとうございます。

市長：今の地元の企業を巻き込むという。ビブスにスポンサー企業が書いてありましたよね。

越水さん：ビブス、これ見せていいですか。

市長：ちょっと見せてもらっていいですか。

越水さん：これ、後ろに書いてあるんですけど、僕ら川崎中部って勝手につくっていて、今、北部・南部という論理があるんですけど、その中で、僕がやっているのは、ここに今14企業が入っているんですけど、全部高津区、宮前区、中原区に拠点がある企業なんです。なので、例えばスポンサーしたいと手が挙がっても、川崎にゆかりがないところはお断りしているんですよ。

グリーンバードをやられている方がさっきいましたけど、グリーンバードは、コカ・コーラを含め、みずほ銀行とかナショナルネームが入っているんです。これにもナショナルネームが2つ入っているんですけど、これはちゃんと高津区、宮前区、中原区に拠点がある企業さんで、それ以外のところは入っていないんですよ。

地元を盛り上げようとなったときに、外からの出資も必要なんですけど、やっぱり地元でこういうことをやりたい企業さんは、まだまだ僕はいると思っています。なので、そういう企業さんと共に

狭いエリアを盛り上げていくことで、例えば、じゃあ僕がこういうふうにやっています、僕がポイ捨てをやめましょうという力も多分結構大きくなると思っていますよ、こういう活動していると。そのためにやっている部分もあって。

僕ら実はごみをなくそう、えいえいおーというのをやっているのではなくて、みんなと一緒にこういうところに参加することで、多分今ここにいる人はごみを捨てないと思うんですよ。ごみ拾いしなくてもいいぐらいですね。だからこれを着て何かやるともうごみを捨てないみたいな、それはやっぱり影響力がある企業、影響力がある個人がこのまちに増えていくことがすごく大事ななと思っているので、僕はこの活動をやっています。

市長：ありがとうございます。すばらしい取組ですよ。拍手が沸いていましたよね。

越水さん：ありがとうございます。ぜひ活動してください。参加してください。第一日曜日にやっていますので。

市長：いや、いいですね。結局きれいなまちは、まちの価値を上げるじゃないですか。例えば、今、越水さんは不動産業もやられているというふうなことを言われましたけど、きれいなまちイコールさっきの、何でしたっけ、ブローケン・ウィンドウ・セオリーの話も出ていましたよね。何かごみが多いところにどんどんごみがたまっていく。そこが犯罪のあれになっていくみたいな、そういう循環をさせないためにもなっていますよね。

越水さん：そうです、そうです。僕、不動産業をやっているんですけど、きれいなまちは人が増えているんですよ、実際に。マンションが建つところもそうなんですけど、マンションでも新築のマンションが建つところはきれいなんですよ、まちもきれいになるんですね。

いろんな地方に行ったときに思うんですけど、駅前に大きな新しいビルがどんと、今で言うと、長崎だとか福岡とかいろいろやっていますけど、そういうところは人が増えていくじゃないですか。そういうところは、ごみは実は少ないんですよ。なので、結構そういうインフラを起こすという部分も必要だし、あと僕がやっているこの活動は、実は入居者さんにも全部伝えているんですけど、正直に言いますが、マンション自体もきれいに使ってくれるし、家賃自体も高くても払ってくれるしというすごくいい方向に働くんですよ。やっぱり美化がすごく大事だなというのは、日々マンション管理をやっていると感じるところです。

市長：ありがとうございます。だから本当にマンションから、エリアからと少しずつ大きくしていくという、まさにそういう取組を今実践していただいているという感じですよ。キーワードはやっぱり民間の力をうまく活用しようと。やりたい人、やってもいいよという人たちをうまく巻き込もうということですよ。

ありがとうございます。ぜひこれ実証実験をやってみましょうよ。これ溝の口周辺とかで1回置いてみて、それこそ高津出身のアーティストの方がたくさんいますよね。ああいう方たちの力を借りるとか、手伝ってもいいよと言っている田中さんのような学生さんとか、大学生さんもいらっしゃるでしょうし、何々小学校の何年生が管理していますでもいいですし、そういうルートをつくってみると、実際にやってみてどうだったのか、うまくいけば横展開できるだろうし、そういう新しい文化がつかれるかもしれませんね。

実際、川崎市民の意識のレベルというのが非常に高いと思うのは、ペットボトルを回収するじゃないで

すか。川崎市のペットボトルは軽く洗浄してあるので、実はプラスチックの売値が高く設定されるんです。他の都市に行くと、飲物が残っていたりとか、扱いが悪かったりということで安値で取引されるんです。ですから、川崎市はこの首都圏の中では、一番高値で売買がされるというのはそういうことですよね。

川崎市民の意識の高さで、一時期廃プラがすごく値段で売れたとき、何と1年間で5億円も売ったんですよ。ペットボトルで5億円も稼げるのみたいな。最近ではプラスチックの値段が下がってきているのでそこまではいかないんですけど、一時期1年間で5億円。それは皆さんの協力のおかげ。これ、手入れが悪いと、扱が悪いとぐっとお金が下がっちゃうということなので、そういう意味では意識の高い市民の皆さんが、そういう経済までつくり出す可能性があるから、ちょっと実証でもやってみたいなというふうに思いますね。

さっきのスライドを出してもらっていいですか。何でしたっけ、これですね。まちをきれいにする人を増やすのと、これ仕掛けの部分をちょっとやりましたけど、最初のポイ捨てしない人を増やすという、これ両方循環なので、両方必要だと思うんです。そこのところは皆さんどうでしょう。結構子どもというキーワードもさっきあったと思いますし、いろんな楽しい仕掛け、人とのつながりみたいなのがありましたけど、こんなアイデアあったらいいんじゃないかなというもの。

どうぞ、お願いいたします。

高橋（準）さん：下作延という地域で町内会長をしております高橋と申します。

町内会では、公園管理運営協議会というのを持っていて、そこで地元の公園を月2回、日曜日ですけれども清掃しています。そこに今年の6月からうちの町内会ではない隣の学区の小学4年生の男の子が4人、掃除を手伝わせてくださいとって来られたんですね。うれしくて、それが1回で終わるのかなと思ったら、ずっと付き合ってくれていて、おじいちゃん、おばあちゃんもみんな喜んで、我々も20名近くで掃除しているんですけども、それに子どもが手伝ってくれた。小学4年生だったんですね。あるとき、何かの情報で、川崎市の小学校4年生は、環境学習をしているというのをちょっと目にしたんですね。こういう効果もあるのかなと思って、うれしく思った、そんな次第です。

市長：いや、ありがとうございます。そんなスーパー小学生がいらっしゃるんですね。それも学区外ですか。

高橋（準）さん：外です。

市長：ほお。

高橋（準）さん：たまたま友達同士で遊びに来たときに掃除をやっているから、それが面白そうだとということで手伝ってくれたんです。

市長：へえ、ありがとうございます。

僕、先月、東住吉小学校に行ってきたんですけど、中原区にある小学校なんですけど、そこでこの1年間ぐらい二ヶ領用水の清掃活動を毎月やっていて、1回、福田さんも来て一緒にやらないかというお誘いがあったので行ってきたんです。もともと発祥は「シニアの力」というボランティア団体の人たちが二ヶ領用水の清掃活動をやっていただけですけども、それに感激した小学生と一緒に自分たちもやるということで取り組んで、今度、自分たちで「シニアの力」に対抗して「子どもの力」という団体を立ち上げたというので、これからはずっと、小学校を自分たちが卒業してもつながっていく団体をつくったん

ですとって、賛同してもらえますかというので、賛同しますと、僕、会員になりました、この前。

いや、だからそういう何かいろんな活動をしている団体と子どもたちをどういうふうに参加させていくかというのはとても大事だと思うんですけど、今井さんから発言をいただきましたけど、今井さんもさっき子どもの可能性、娘さんもそうですけど、娘さんにちょっと聞いてみようかな。子どもたちは巻き込まれたのかもしれないし、巻き込んだのかもしれないし。

今井（結）さん：子どもは、意外と環境問題に興味はあるんですよ、授業でやったりするので。でもきっかけがやっぱりなくて、そのきっかけをつくるのが私たち団体の目的でもありますし、きっかけづくりというのをもっとまち全体でできたらいいんじゃないかなと思います。

市長：ありがとうございます。

飯田さん、明治大学でボランティアサークルをやっているんですけど、自分たち大学生よりも若い人たちと交わることはありますか。

飯田さん：高校生や中学生ですね。

市長：ええ、そうです。

飯田さん：そうですね。地域の活動に参加する中でそうしたごみ拾いとかで一緒に関わらせていただく機会があります。

市長：自分たちよりももっと若い世代と関わりたいという意識はありますか。

飯田さん：そうですね。そういう地域の活動に参加されている若い子たちは、やっぱり意識も高くて、私たちが新しい視点からすごく物を見られるようになるので、今後も関わっていききたいなというふうには感じていますね。

市長：ありがとうございます。

金田さん、ちょっとご発言していただいてもよろしいですか。

金田（優）さん：私は高津区に住んでいて、まちのごみ拾いをしているんですが、それを始めたきっかけというのが、私には11歳の息子がいるんですけども、彼が5歳の頃かな、とある子どものワークショップで海洋プラスチックごみというのがあって、それが今すごく世界の海を、環境を壊していて、それが巡り巡って人間にも戻ってきていて、人間の体にも害を及ぼしているよという話を聞いたんですね。

そこからビーチクリーンに通うようになったんですけども、今までは工場排水とか生活排水で海が汚れているという感覚であつたんですけども、行ってみると本当にプラスチックごみが大量に落ちていて、拾っても拾ってももういたちごっこというか、次の日、また朝行ってみると、前日拾ったことがうそのように物すごいごみが落ちているということから、どうしたらいいんだろうとすごく思ったんですね。

それから何度もビーチクリーンに通うんですけども、これは1人でやってもしょうがないなと思って、そのうち、海洋ごみの7割から8割というのはまちから来るということを知ったんです。ということは、私、海から遠いところに住んでいるし、まずは自分のまちからきれいにしていくことが必要

だなどいうふうに思い始めて、まちのごみ拾いを始めました。

内陸のまちに住んでいる人は、海洋ごみに対しての責任が7割、8割あるわけですが、それをどれだけの人が知っているのかなと思ったんですね。実際、その海洋ごみを拾ってきて、それをアップサイクル、さっきお話がありましたけれども、それでアクセサリを作るというワークショップを個人的に始めました。いろいろなイベントに出て、子どもたちに対してこういうかわいいアクセサリを作れるよという提案をすると、子どもたちがみんな作りたいと言ってくれるんですね。その後ろで実は聞いている親御さんたちに対しても、側溝に捨ててしまったたばこというのは、それが川から海に流れて、そこで海洋汚染している。その汚染されたプラスチックごみもそうですけれども、海洋の海が雲になって、内陸に雨を降らせているというところから、やっぱり雨雲の中にも今海洋プラスチックはあるし、世界で一番深いと言われているマリアナ海溝からも見つかったり、北極の氷の中からも見つかったり、もう本当に世界中に広がっているんですね。それがもう人間の体の中にも取り込まれていてというところなんです。

市長：ありがとうございます。海洋プラスチック、実は先週、市制100周年の事業の一環で、子どもたちの環境ポスターコンクールをやったんです。子どもたちに投票してもらったんですね。1万票ぐらい集まったんですけど、低学年、中学年、高学年の部というのがあって、優勝者の3作品のうち2つは亀が描かれていました。低学年と高学年だったかな。そうですね。

亀にビニールが巻きついたりしているとか、ペットボトルと亀とか、要するに海洋プラスチックに対する意識というのは、小学生の子たちは非常に持っているんだというのを、かつそれに対して危機感を覚えて自分たちが投票しているわけですね。ですから、子どもたちは意外と環境教育、がっつりできている部分もあるんですけど、むしろ大人の方がやや分別にしても課題はあるんじゃないかなと思います。ただ、子どものうちから体験してもらい、ごみ拾いだとか、やっぱり意識を変えるよりも行動したほうがはっきり言って一番早いというふうに思うので、そういう機会をどうやって創出していくかということだと思うんですけど、今日は企業の方も来ていただいているので、企業の方からも少しご意見をいただきたいと思います。

五十嵐さんと高田さんはJTBから来ていただいていますね。まさにナショナルブランドですけども、でも川崎市内に拠点を置いていただいているいろんなことにご協力をいただいている立場から、ちょっとご意見をいただければと思うんですが、いかがでしょうか。

五十嵐さん：そうですね、私も5年目になりまして、本当に勉強中ということではあるんですけども、社会人になって本当に学生さんたちとの交流がもう一気になくなったなというのは感じていたんですけども、今日、参加してそういう交流ができて楽しかったなと感じました。

私たちのブランドが交流創造事業といったところなんですけれども、こういったきっかけをどんどん私たちのコンテンツでつくっていきなと思っていて、先ほどの街コンだったりとか、異業種の交流会だったりとか、ふだんの会議とかで、ごみ捨て、今日のごみ拾いのイベントを取り入れたりとか、やっぱり前向きな意見が出たりだったりとか、そういった視点をすごく学べたので、川崎市さんと協力して、どんどんこういったイベントを一緒につくり上げていって、川崎の文化として根づいていけたらいいなと思っています。

市長：うれしいですね。ありがとうございます。川崎の文化として根づいていくということに協力していただけると。ありがとうございます。

高田さん、何かコメントありますか。

高田さん：ありがとうございます。私たち本日2名、参加をさせていただいているんですけれども、五十嵐は一般の企業向けの部署に所属しております、私は教育営業課で、小学校から中学校、高校の修学旅行に一緒に行かせていただいたりしているんですね。

それに当たって、先ほどお話しただいたように、子どもたちが大人になって、子どものときからポイ捨てをしないことを意識すれば、大人になったときにポイ捨てしない人が増えるのではないかなと思っていて、私は幸いなことに、小学校、中学校、高校生と関わる機会がすごく多い仕事に携わっているんで、今、小学校でもSDGs学習に取り組みされていて、子どもたちの反応もすごく積極的です。なので、修学旅行や校外学習、学校の授業の一環としてそういったことにすごく積極的に取り組まれたいという学校様のお声も私は直接先生方とお話をして伺いする機会も多いので、この活動を参加者、やりたい人だけにとどまらずに、学校の授業の一環として取り入れていくのがいいのかなと思っています。

今回、大学生やボランティアの方にたくさん参加いただいているので、もし可能であれば、そういった学生から小学校に教えてあげる、こういうことを活動していますよと、教えてあげる機会を創出できれば、子どもは大人に言われるよりも、実際に活動している少し先輩に教えてもらったほうが意識が変わるのではないかなと思っていて、今そういった活動されている方は、もちろん企業様も含めて、それをつなげていけるのが私たち交流創造事業をしているJTBの役目なのではないかなと思っていますので、今回のこの場を無駄にせず、最終的には産官学をつなげて川崎市全体で解決していくのが一番理想かなというふうに本日思いました。

市長：ありがとうございます。意識の高い子どもたちだけじゃなくて、やはり授業の一環だとか、みんなが参加できるような機会が必要なんじゃないかなというすてきなご意見をいただきました。

富士通ゼネラル、もう本当に地元で活躍していただいております、鈴木さんも来ていただいておりますので、コメントをいただいてもいいですか。

鈴木（義）さん：ありがとうございます。うちの会社はすぐそこ、南武線のところで、ご覧になっていただける方も多いと思うんですけれども、今回、先ほどの企業が高津区に存在しているということで、名前が見当たらなかったということで、我々もこういうものに参加するというのが、企業は、どっちにしても損益とか、もうかる、もうからないとか、そんなことにどうしても終始してしまうんですけれども、結局こういう環境活動とか地域貢献というのに参加していくということが、ここは企業名が例えば出ているだけで、やっぱり最終的には消費者の方にもその企業を支持していただけるということにつながっているんだというのは、トップ共々みんな分かっていることなので、呼びかけていただいて、きっかけがあれば賛同していく企業というのは多いと思うし、川崎市の価値が上がっていくということは、川崎市に存在している企業の価値も上がっていくということになりますので、この呼びかけというのは企業に対してはもっともっとしていただければ必ず響くものだろうなと思います。

あと、うちは障害者雇用をやっている会社ですので、もちろん日々の清掃活動が直接私の会社の売上げにつながっているという意味では本当に直結しているんですけれども、その中でボランティア活動というのも取り入れていけないといけないなということで、私道の清掃であるとか、年に1回の活動というのをしていますので、そういった意味では企業の視点からいっても、こういう活動にもっともっと参加していきたいというのは、うちだけじゃなくて、呼びかけてさえいただければ、きっかけとして絶対に動くと思うので、ぜひお願いしたいなと思います。

市長：ありがとうございます。そうですね、今、川崎区のほうでは落書きがすごいので、落書き消しの活動に、あそこのロータリーの皆さんだとかが中心になって、地域の企業の皆さんにお声がけして、企業の人たちがすごく出てきてくださるんですよ、JTBさんもそうですけれども。学校も部活動単位で集まってくるというので、一気に300人ぐらいで落書き消しをやっているんですよ。すごいムーブメントになっているんですけど、それが恒常的にずっとやり続けたいいけないというのが悔しいところなんですけれども、だから落書きされる前に、さっきのアートの話じゃないですけど、ミューラルアートにしちゃえみたいな、そういう取組も今やっております。

さて、最初、冒頭に水口部長のほうから説明があったように、来年の3月にもう1回、こういうイベントみたいなのをやりたいんです。そのときに、実際、今出たアイデアを本当にやってみよう。話し合っただけじゃもったいないので、本当にやろうということにしたいので、少し最後まとめに入りたいんですけど、この2回目の清掃イベントはどういうふうにやったらいいか、もう少し巻き込み方、誰に対してどういうふうにといいなを少しお話しできたらなと思います。

さっきの実証実験のアイデアは少しもませてください。環境局だとかほかのところの局にも関係するので少し調整が必要かなと思うんですけど、それはぜひやってみたいと思うんですが、まずは次回の、今日やってみて、次のアイデアがありましたらお願いします。

本江さん：Cグループです。Cグループのポイ捨てのないきれいなまちに向けたアイデアの中で、飛び入り参加ができるごみ拾いができたらもっといいんじゃないかなという……

市長：ごめんなさい。もう一回言ってもらっていいですか。

本江さん：飛び入り参加とかできる。

市長：飛び入り参加ね。

本江さん：今日のイベントだと事前の予約が必要だと思うんですけど、今日、Cグループの中で見た方で、お母さん、僕もこれやりたいと言ってきてくれた子がいたんです。

市長：途中で。

本江さん：そうそう。それで、トンぐだったり軍手だったりを渡せなかったのが今日は参加できないんだという形になったみたいなんですけど、これからやる清掃イベントで清掃している風景を見た自分もやりたいなと思ったときに飛び入り参加ができるごみ拾いがあったら、自分もすぐ参加できますし、いいんじゃないかなと言っていました。

市長：なるほど。当日でも一緒に行かない？というふうに誘えるということですよ。

本江さん：そうそう。

市長：ああ、いい話ですね。すばらしい。

ほかはありますか。どこのターゲットをもう少し強化したほうがいいと思いますか。

田中さん：度々申し訳ない。さっき話していたように、子どもはもう今、既に環境問題を小さい頃から学んでいるので、比較的、ポイ捨てをする子が少ないと思うんですね。自分はそれはよく体感していて、まず参加していなくてももともとポイ捨てはしたことないよという子、いい子は一定数いて、それよりもどっちかという、捨てられている方というのは大人の方が多いのでもまた事実だと思うんですね。仕事終わりに一杯路上で立ち飲みされて捨てられちゃうとか。そういう方も多いと思うので、ターゲット層的な話をすると、今日は結構子どもの方も多かったと思うんですけど、企業さんを巻き込みながら、企業さんとしても出ていただいて、40代とか50代とかを目安に清掃イベントを開けたら、それこそ解決としての一歩としては面白いんじゃないかなと思いました。

市長：なるほど、ありがとうございます。

美化運動とかでもすごく活躍していただいている小林さんから、どういうターゲット層を増やしたほうがいいのかなど。次、ターゲットを当てていくべきなのかなど。その後、篠倉さんにもちょっとご意見をいただいてもいいですか。

小林さん：先ほどBグループとお話ししたんですけど、まずは、子どもさんはほとんど捨てないだろうと。それとあと我々高齢の人ももうほとんどポイ捨てはしないんじゃないかと。じゃあ誰が捨てるんだということになっちゃうと、やはり先ほどおっしゃった、学生さんはほとんど捨てないですよ。そうすると、やはり中高年。会社の憂さ晴らしで飲み屋に行っても、飲み屋の中はたばこは吸えませんから、そうすると会計終わって出た後に捨てるか、それしかないんですよ。ですから、うちのまちは、大通りはほとんどたばこは落ちていません。ただ、飲み屋街ちょこちょこあるんですけど、その近辺だけです。前から比べるとほとんどたばこの吸い殻は落ちていないと思うんですよ。

市長：なるほど、ありがとうございました。

小林さん：それと、学校の先生は何を教えているのかということになって、我々のときは、うちのおじいちゃん、おばあちゃん誰でもポイ捨てしたら怒ると。今はそういう人がいないと。そういう教育、時代になったのかなと思ったのと、今、酔っ払いさんに怒るのは我々も当然注意できないですよ。そうするとお巡りさんもそんなにいませんから、注意する人がほとんどいない。小さなお子さんにはそういうやることないのがたまにやると、それも注意する人がいないと。そういう時代になったのかなと思います。

市長：なるほど。

小林さん：ですから、どうしたらいいかちょっと分からないので。

市長：でも、ターゲット層としては中高年というか、そういうところなんじゃないのかなと思います。

小林さん：間違えていたらごめんなさい。本当にすみません。

市長：では、ありがとうございます。

篠倉さんからちょっとご発言いただいてもいいですか。

篠倉さん：はい。チームフォーラムというところで、二ヶ領用水の中に入っているごみ拾いをしているというのと、あと日々個人で二ヶ領用水沿いをごみ拾いしています。

ごみ拾いしている理由は、二ヶ領用水にはとってもかわいいカモが元気に暮らしていて、そのカモにマスクのひもが引っかかって飛べなくなったらどうしようというところをきっかけにごみ拾いを始めるようになって3年ぐらい続けております。

その中で、今、私は朝6時台から7時台にごみ拾いをしているんですけど、大体夜捨てていらっしゃる方のごみを朝拾っているという感覚がすごく強いです。ですので、これはちょっとチャレンジングかもしれないんですけど、次回は、夜やるのはどうなのかなと。捨てていそうな人たちは、朝、拾っている人のことは知らない時間のサイクルで生きていらっしゃるのかなという気がするので、例えばヘッドライトをつけてとか、ちょっとごみが見つらいですけども、何かその人たちの目に触れる。自分が落としたごみを拾っている人がいるんだと、ご存じないんじゃないか。どう思っているのか私には全く理解できないんですけど、そういう人と直接的なやり取りはしなくていいと思うんですが、何か目に触れて、何か感じていただけるのであるならば、そうしたいなと思いました。

市長：なるほどですね。確かにごみが増えているのは多分夜ですよ。そういう感覚はありますね。

鈴木さん、いかがですか。

鈴木（章）さん：私、今日は高津区ソーシャルデザインセンターの相談窓口の担当として参加させていただいておるんですけども、まさに今日来られている企業の方だったり、地域の団体の方々だったり、本当に1人で、個人で頑張っている方たちをつないで、課題解決に向けて、今みたいなごみのこととか、どういうふうにすればいいかというような問題等、ソーシャルデザインセンターでもこれを考えなきゃいけない取組になってくると思うんですけども、まずもって、大きな問題になりますので、なかなかどういう視点で次の機会どういった形でやればいだろう。これなかなか問題は難しいとは思いますが、今日見た限りですと、やはり子どもと大人、本当にみんな巻き込んで何か取り組めるといいのかなというところで、親子で参加していただく。また親子でなくても親戚のおじさん、おばさんでもいいと思うんですが、何か大人と子どもと一緒に参加しやすいような環境をつくって、また同じような形でやるのがいいのかなと。

市長：なるほど。ありがとうございます。

ほか、ご意見ある方いらっしゃいませんか。

どうぞお願いします。

光廣さん：僕たち去年の12月に登戸クリーンアップ大作戦というイベントをやったことがあって、そのときはまちで働いている人、まちに住んでいる人、まちで学んでいる人を対象にごみ拾いのイベントをしたんですけど、そのときに関わった人としては、コーヒー屋さんとか、あと何だろう、そのまちで働いている人に対して、例えば銀行さんに、僕たちこういうイベントをやりたいな、少しでもきっかけづくりをしていたし、あとは地域通貨という、ふだん多摩区で使われるような地域通貨の方に、最後、ごみを拾ったらプレゼントするみたいなイベントとかをやったことがあって。もっと僕たちがやっている活動とか、今、市長さんがお話しされたごみ拾いとか、そのごみの現状は、全く僕たちは知らないで、何かそういった僕たち以外の人たちがもっと関わるようなイベントをつくりたいというふうに思っていて、実際に企業さんが入っていてもオーケーだし、そこの企業さんの力で何かごみ拾いに行くインセンティブがつけられればもっと面白いイベントになるなと思ったので、次回はもっと規模を大き

く範囲をもっと広くしてやってみると面白いかなと思いました。以上です。

市長：なるほど。ありがとうございます。ターゲット層、皆さんのお話を聞いていると、やっぱり企業の皆さん、働いている人たち、働いている人たちの子どもさんも一緒にという形でもいいんだけど、企業に、今、そうですね、鈴木さんからのお話があったように、呼びかけて、きっかけをいただければ参加しますよというふうなお話もありましたし、確かにそうですね。

いや、それこそあれですね、越水さん、なぜ、溝の口西口商店街のところがあんなにきれいになったのかというふうなのは、それはどういうインセンティブが働いたんですか。

越水さん：多分ですけど、東急が開発していく中で、まず西口商店街は、もう実はもともと、名前出しているのか、たまいグループさんといって、あの辺が大体入っていて、その頃というのは別にたまいさんが悪いとかどうこうではないんですけど、やっぱりまだまだ溝の口のまち自体も雑多だったなと思っていて、東急さんの開発とともに駅前にキラリデッキができたりとか、いろいろあって、周りがきれいになったのもあると思うんですよね。プラス、今、個人店がどんどん入ってきているんですよ。彼らが、やっぱり僕も見ますけど、まず、何というのかな、飲んでいるときの喫煙自体もすごく制限されているじゃないですか。あと各テーブルに灰皿も置いてあるけど、喫煙する場所もあったりとかするんですね。そういうところを結構秀逸にやられているなという部分と、あとはあそこも商店街があるみたいで、朝とかは八百屋さんの方とか、その他のあの辺の近隣の方が掃除しているみたいできれいになっているのもあるみたいですね。

市長：なるほどね。いずれにしても、あそこ昔は、先ほど言われたように、ちょっと怖そうなところから本当に何かきれいでにぎわいのある場所になりましたよね。

越水さん：そうですね。

市長：そういう意味ではすごくまちの価値を上げてくれたというふうに思うんですけど。

越水さん：あそこは溝の口でいうとまさにそのとおりで、今では学生さんとかが映えるまちといってインスタグラムでバズっているという話もしますし、それはやっぱりきれいだというのもあるし、昔風情が残るみたいなのもあると思うんですよね。

市長：そうですね。だから、みんながこのまちの価値を上げていこう、きれいにみんなで使っていこう、捨てないようにしていこうという、そういう空気感みたいなを出していくというのは、すごく大事なことだと思うので、今日いただいた意見を基に、次、来年の3月に向けて、幅広くもう少し地元の企業の、今日も灰吹屋さんがスポンサーしていただいて、協賛いただいてあめもいっぱい配っていただいてというような、こういう地元の企業の皆さんが参加していただけるのは非常にうれしいですし、こういう形でもっとまち全体をきれいにしようというのを学生さんたちも含めてやれるように大規模に広範囲にという話がありましたけど、みんな行けるとい感じですかね。何かすごく前向きで、ありがとうございます。このエネルギーを次回もっと大きくしていきたいなと思います。

もうちょっと言いたいよという方、あと数分ありますが、今日せっかく来たんだから声を上げておきたいという方お願いします。ちょっと短めをお願いします。

金田（優）さん：しゃべり過ぎちゃってすみません。さっきちょっと私が最終的に言いたかったのは、海洋ごみというのがまちから生まれていて、またそれに7割、8割まちの人も責任があるから、それが人体に影響があるんだよ。私たちの体に害があるよ。そして次の子どもたちにも引き継いでいっちゃう負の遺産になるんだよということをもっと一人一人の方が知っていれば、たばこ1本捨てることも躊躇するかもしれないし、きっと捨てる人も誰かのお父さんだったりするんじゃないかなと思うんですよ。なので、まちの落ちているごみを1つ拾ってみようと思うきっかけになるかもしれないから、私たちに害があるということ、何かもっと全面的に皆さんが知っていったら少し生活が変わっていくのかなと思いました。

市長：ありがとうございます。これ本当に伝え方はすごく大事だと思うんですよね。さっき例を出してくださった方、誰だったかな。小学校の子どもたちが描いた絵を、不法駐輪というか、置きちやいけないところに置いていたのを、そこに貼ったら一気になくなりまして、あれはすごいなと。ナッジという仕組みですけど、例えば1列に並んでくださいというふうに言ってもなかなか並ばないのを、矢印とか足跡とかをつけたら何となくみんなちゃんと並ぶというのと、同じ効果なんですよ。

だからごみを捨てないナッジ効果を生むとか、捨てるんだったらちゃんと分別するようなナッジというのをもっともってやっていかなきゃいけないなど。だから、今おっしゃっていただいたような、そういう健康に害があるんだよというのは、どういうふうによく市民の皆さんに伝えていくのかというのはこれからもちょっと研究させていただきたいと思います。

実はこのナッジの取組を効果的に使おうということで始めたのは、川崎市役所の中で環境局が一番早くて、チラシ1枚作るのでも、市民の皆さんに効果的に伝わって、行動変容につながって分別してもらおうというナッジを取り入れたレポートを作りまして、こういうことをもう少し市全体でも取り組んでいきたいなと思っています。

今日はごみ拾いの活動から、車座まで皆さんお付き合いいただいて、本当にありがとうございました。今日の皆さんからのご意見を基に次の3月につなげる。そしてその先へとつなげていきたいと思っていますので、よろしくをお願いします。

最近、子どもたちから直接意見をもらえるようになったんですね。GIGA端末というのがみんなに配付されたので、市長への手紙の子ども版ができたので結構いろんな意見をいただいています。そういうのをどう取り組んでいます、結果どうなりましたというところまでちゃんと見せていくということがすごく大事な点と。それはもう市民の皆さん全般に対してもそうなんですけれども、自分たちの言ったことが結果どうなったのかと。今回の車座についても、結果にしっかりつなげていこうと思っています。ご協力、ご参加いただいたことに感謝申し上げます。ありがとうございました。

司会：福田市長、ありがとうございました。また参加者の皆様、本日はどうもありがとうございました。以上をもちまして第69回車座集会を終了させていただきます。